

論 考 想

「遊びを通して子どもは学習する」

内田伸子 十文字学園女子大学特任教授

わが国の学力低下問題

義務教育の終わりに経済協力開発機構（OECD）が実施した国際学力調査の結果をみると日本の高校生は、論理力や記述力を必要とする課題に白紙答案が多く、先進諸国では最下位の成績でした。文部科学省が全国の小学校6年生、中学3年生全員に実施している学力・学習到達度調査においても、論理力・記述力を測定するB問題（活用力）の成績が低いという結果が明らかになりました。さらに、2010年7月28日に、文部科学省幼稚園課が、幼稚園卒の子どもは保育所卒の子どもに比べて学力テストの成績が高いという結果を発表しました。幼児期から学力格差が始まっているのでしょうか。私たちが実施した日韓中越蒙国際比較短期縦断調査の結果から検証してみたいと思います。

学力格差は幼児期から始まるか

教育社会学者やマスコミは、「学力格差は経済格差を反映している」と述べています。東大生の親が一番金持ちということを示すグラフまで出しています。経済格差は子どもの発達や親子のコミュニケーションに一体どんな影響を及ぼすかに興味をもち、日韓中越蒙各国の3,4,5歳児3000名を対象にして、リテラシー（読み書き能力）の習得に及ぼす社会・文化・経済的要因の影響を調べてみました。

日本の結果をご紹介します。71文字の読みの力、また鉛筆で文字を書く準備がどれほどできているかの模写力は5歳後半になると家庭の経済の影響を受けなくなります。ところが、絵画語彙検査で測定した語彙力は加齢に伴い家庭の経済の影響が出てきます。

家計の豊かな家庭では、習い事をさせているのかもしれませんが。そこで早期教育の影響を調べてみました。語彙得点に関しては、習い事をしていない子どもよりも、習い事をしている子どものほうが成績が高いのです。しかし、芸術系、運動系、ピアノやスイミング、体操

教室に行っている子どもと、受験塾や英語塾に行っている子どもの間に語彙得点の差はなかったのです。

体操教室に通っている子どもの方が運動能力が低く運動嫌が多い

東京学芸大学の杉原隆名誉教授は全国3・4・5歳児全国9,000名の運動能力調査の結果も同様でした。体操教室やバレエ教室に通っている子や、体操の時間を設けている幼稚園や、保育所に通園している子どもの運動能力が有意に低く、運動嫌いの子どもも多いという結果が発表されました。

なぜこのような専門的な技能の訓練が効果をあげないのでしょうか？ 杉原先生のグループでは教室に向き、何が行われているかを観察したり指導者にインタビューして運動能力が低くなる原因を探ってみました。

体操教室やバレエ教室で運動能力が低いのは、①特定の部位を動かす同じ運動を繰り返している、②説明を聞く時間が多く肝心のからだを動かす時間が少ない、③競争意識が芽生える5歳後半ごろになると、他人よりうまくできないと教室には行きたがらなくなる、などの原因が考えられるということでした。

子ども中心の保育で子どもは伸びる

私たちの調査結果でも、幼稚園か保育所かという園種の違いは全く関係がなく、子どもの主体性を大事にした、遊びを中心に保育している自由保育の子どもが一斉保育の子どもより語彙得点が高く、知能も発達しているという結果が明らかになりました。「アプローチ・カリキュラム」と称して、小学校1年生の国語や算数、体育などを、先取り教育をしている幼稚園や保育所の子どもに比べて自由遊びの時間が多い幼稚園や保育所の子どもの語彙力が豊かであり、想像力も豊かに育っているという結果が明らかになったのです。

共有型しつけに軍配

さらに、しつけスタイルと語彙能力の間にも関係がありました。語彙得点が高い子どもは「共有型しつけ」を受けています。語彙得点が高い子どもは「強制型しつけ」を受けているのです。共有型しつけというのは、親子のふれあいを大切に、子どもと楽しい経験を共有したいと思っている家庭のしつけです。低所得層であっても、共有型しつけを行う親のもとで生活する子どもは、読み書きの得点、リテラシーの得点、語彙得点が共に高くなるのです。逆に、子どもをしつけるのは親の役目、悪いことをしたら罰を与えるのは当然、力のしつけも多用している（悪いことをしたらひっぱたく）、やるべきことをやらないとガミガミ責め立て、事細かに言い聞かせるようなしつけ「強制型しつけ」をしている家庭の子どもの成績が低いのです。強制型しつけのもとでは、かなりの高所得層であっても子どものリテラシーの得点、語彙得点や知力・想像力が低いのです。

幼児期のしつけ方は小学校の学力まで左右する

この子どもたちが小学校に入り、1年間小学校で学習をした後、3学期にPISA型読解力テストを受けてもらいました。幼児期に語彙が豊かだった子どもは、PISA型読解力の成績は高いのです。それから、書く準備ができて子ども、つまりいろいろな製作物を作ったり、絵を描いたり砂団子を作ったりなど幼稚園や保育所で指先をよく動かしていた子ども、造形活動が好きだった子どもは小学校でのPISA型読解力テストの成績が高くなりました。また、幼児期に共有型しつけを受けていた子ども、自由保育（子ども中心の保育）で育った子どもの学力も高くなりました。

これは、韓国も全く同じ結果でした。幼児期から知識伝達型の詰め込み教育をしている中国だけは少し違ってしつけスタイルは全く影響がありませんでした。

しつけスタイルやどういう保育をしている幼稚園か保育園かを選ぶことができますから、とても希望のもてる結果でした。幼児期の遊びは大人のような仕事に対立するものではなく、主体的に活動することを意味しています。主体的に面白がって遊ぶとき、頭は活発に働いてくれます。遊びを通して子どもはいろいろ吸収しているのです。

子ども時代の遊びを通して社会的成功が約束される

調査によって幼児期の親のしつけは小学校の学力テストに影響することが明らかにされました。まさか、大人になるまで影響は続かないだろうと考えていましたが、気になって仕方ありません。乳幼児期のしつけの影響力を成人で調べてみたいと思いました。

2013年11月～12月に、23歳～28歳までの成人2,000名を対象にして子ども時代の過ごし方やどんなしつけを受けたかについて、ウェブ調査をしました。

すると、興味深い結果が明らかになりました。受験偏差値68以上の大学を卒業して難関試験（司法試験や国家公務員試験、調査官試験、医師国家試験など）を突破した人々は子ども時代に思いっきり遊んでいたということが明らかになりました。

さらに、親は自分と楽しい時間をいっしょに過ごすことが多く、自分の好きなことに集中して取り組ませてくれたと答えています。また、絵本の読み聞かせもよくしてもらって、大人になった今も読書好きであると回答してくれました。またどんなふうに親は子どもに接していたかを尋ねると、「共有型しつけ」を受けていた人が多かったのです。

【提言—子どもたちの想像力を育てる】

「50の文字を覚えるよりも、100の何だろ、を育てたい」自分から本当にやろうとしないと自分の力にはなりません。自分で関心を持てばあつというまに習得してしまいます。文字は子どもの関心の網の目に引っ掛かってくるにすぎません。肝心なのは文字が書けるかどうかではなく、文字で表現したくなるような内面の育ち、つまり創造的な想像力を育むことが、乳幼児期の発達課題なのです。子どもの想像力を育てるためには、**第1に、子どもに寄り添うと、安全基地になる。第2に、その子自身の進歩を認め、ほめていただきたい。第3に、生き字引のように余すところなく定義を与えない。裁判官のように判決を下さない。第4に、禁止や命令ではなく提案の形で言ってほしい。第5に、子ども自身が考え、判断する余地を残すこと。**

大人が子どもの主体性を大事にした関わり方をするによって、自律的思考力や創造的想像力が育つのです。